

豊田市長立大林小学校の実践

1. 子供のことを理解する

「子供を語る会」で共通理解を図る

| | | | |
|------------------|------------------|--------------|---------------------|
| 氏名 | 性別 | 年齢 | 学年 |
| ○君 | 男 | 6 | 1 |
| 保護者 | 職業 | 勤務先 | 勤務時間 |
| ○様 | 会社員 | 株式会社 | 9時～17時 |
| 連絡先 | 住所 | 電話番号 | メールアドレス |
| 〒113-0033 東京都文京区 | 〒113-0033 東京都文京区 | 03-XXXX-XXXX | example@example.com |

子供の実態を的確に捉え、適切な指導と必要な支援が誰でも実施できるように、左図のようなシートを資料として、「子供を語る会」で情報共有している。

アセスメント

必要に応じて、面談、SCによるWISC等の検査、外国にルーツのある児童対象とした「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント (DLA)」を実施し、客観的に子供の状況を把握できるようにしている。

関係機関との連携

子供の状況によっては、SCやSSWに関わってもらい、教育委員会や児童相談所、市役所子ども家庭課等関係機関との連携を図る。



【DLAとは】

2. 子供が認められる機会を大切にす

「いがほら賞」の表彰で自己有用感を高める



善行児童の表彰として「いがほら賞」を実施している。できるだけ多くの子が表彰されるように、小さな善行も見逃さない。

僕のしたことを認めてもらえた。いがほら賞がもらえてうれしい。これからもみんなのためになることをしよう。

※いがほら賞：日々の生活の中でよかった親切な行為や、何気ない善行をした児童を教職員、保護者、地域の方等が推薦し讃えるもの。

1年生からの手紙やアンケート結果を励みに



6年生の総合的な学習の時間の実践「ODGs～大林小をよりよくしよう～」では、どうしたら1年生が上手に掃除に取り組めるかを考えた。

「掃除のやり方を教えてくれてありがとう」と書いてある。今まで頑張ってきたよかったです。

※ODGs:「Obayashi Development Goals」の頭文字をとったもの。「大林小をよりよくするための取組」で6年生の「総合的な学習の時間」の単元名。

3. 「共に伸びる」を意識する

「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくり



国語科で身に付けた話型を、ペアやグループ学習に生かしている。お互いを尊重し、認め合いながら学びが深まっている。

学校の昼ご飯は「弁当」か「給食」か。○○君が言うように給食も良いけど「弁当」は、好きなものが食べられて食品ロスが少ないからよいよね。(5年国語・話し合い活動)

学級の仲間と「話し合う・教え合う・認め合う」

KJ法を用いて、1年生との掃除で課題になることを整理した。お互いの考えを大切にしながら、1年生が自分たちで掃除に取り組むための方法をまとめていく。



1年生が「手伝って」と言うと、つい手を出してしまう。まずは、自分でできることはないかな？

4. 「主体的な活動」を導き出す

基礎基本の定着・ICT機器の活用



子供の主体的な活動を生むためには、その基礎となる知識・技能の定着は欠かせない。授業時間に加え、朝の15分間を「チャレンジタイム」とし、各学年の状況に合わせて、ドリル学習(紙のドリルとデジタルドリルの併用)を行っている。また、タブレット端末を使い、タイピング等基礎的技能を身に付け、グループの意見をまとめたり、プレゼンテーションを作成したりと、積極的に活用している。

5. 子供同士が活躍を認め合える

「頑張ってたかった」振り返りの場を大切に



グループごとに自分たちの清掃活動について振り返り、今後1年生と活動するときの重点目標を決めた。タブレットを使い、授業の感想を作成した。学級で共有された感想では、「言葉づかいに気をつけるといいことを2班の発表で気付いた」「5班の目標の『きりかえ』は、掃除以外の場面でも大切だと思う。自分たちは気付かなかったからすごい」という、他のグループを認める前向きな意見が出された。

自己有用感・自己肯定感を高め、絆を感じる集団づくりの在り方

学校は、子供が人格形成を図る大切な場所であり、どの子供も通いたくなる魅力ある場所であればなりません。そこで、「生徒指導リーフ」No. 9-1では、「自己有用感・自己肯定感を高め、絆を感じる集団づくりの在り方」として、魅力ある学校の実現を目指して、「自己有用感・自己肯定感を高める」、「絆を感じる集団を育む」ための5つの視点と、9つのポイントを紹介しました。

今年度、県内の各小中学校において、5つの視点と9つのポイントを取り入れた様々な実践をしていただきました。本リーフでは、こうした実践を紹介することで、各校がこれまで以上に魅力ある学校となることを願っております。本リーフを参考に、できそうな実践から取り組むことで、各校の実態に応じてアレンジを加えながら、実践を進めていただくと幸いです。

自己有用感・自己肯定感を高める

他人から認められた、自分は役に立っているという「自己有用感」と、自分のことが好きであるという「自己肯定感」をバランスよく高めていく必要があります。

視点1

どれだけ子供のことを理解しているか

- ①子供の今の姿を捉えよう
- ②結果をほめるより、その過程を理解し、認めよう
- ③これまでの生活の様子を知り(引継ぎ)、職員間で情報の共有を図ろう

視点2

子供が認められる機会を大切にしているか

- ④他を認める雰囲気を生みだそう
- ⑤子供のよさを保護者、地域と共有できる体制を構築しよう

温かい居場所

魅力ある学校

どの子供も通いたくなる学校

視点3

「共に伸びる」を意識した教育活動となっているか

- ⑥グループで話し合う目的を明確にしよう

視点4

「主体的な活動」を導き出せているか

- ⑦教師の「させたい」を、子供の「やりたい」へ変えよう
- ⑧子供の「自分たちでやるんだ」という気持ちを支えよう

視点5

子供同士が活躍を認め合える場を用意できているか

- ⑨振り返りの場を大切にしよう

※丸数字はポイントを表している。
例) ①はポイント1



互いをよく知り、それぞれの力を発揮しながら、尊重し合い、共に成長する喜びを実感し合える仲間である「絆を感じる集団」を育む必要があります。

絆を感じる集団を育む

自己有用感・自己肯定感を高める

視点1 どれだけ子供のことを理解しているか

ポイント1

子供の今の姿を捉えよう

《朝の昇降口での子供への言葉かけ》

子供の表情や声、服装、体調（健康観察カードの点検）等、子供の小さな変化を見逃さないよう、毎朝、職員が昇降口に立ち、子供たちとあいさつを交わしている。また、個に応じた温かい言葉かけをすることで、共感的な人間関係を育み、子供たち一人一人の自己存在感を高めることにつなげている。

ポイント2

結果をほめるより、その過程を理解し、認めよう

《生徒発案のノーチャイム制の実施とその見守り》

校訓の「時間尊重」のもと、生徒会を中心に、ノーチャイム制を取り入れて、自分で時計を見て行動することを目指した。生徒会の発案で、腕時計の携行も認められることになり、時間を守って行動するように声を掛け合う姿が見られるようになった。教師が、生徒たちの主体的な行動を見守り、認め、褒めることにより、自分の行動に自信をもてる生徒が増えている。

ポイント3

これまでの生活の様子を知り（引継ぎ）、教職員間で情報の共有を図ろう

《校務支援システムを活用した子供の理解と職員間で情報の共有》

振り返り支援システム・保護者連絡ツールの導入及び、これらのツールと既存の校務支援システムとの連携を図ることで、子供の学びの状況や困り感を容易に察知できるようになった。その結果、個に応じた支援・指導の在り方を早い段階から共有できるようになってきた。迅速な対応が可能になり、子供との信頼感を築く上で大きな効果をもたらしている。



【子供の様子をタブレットで確認】

視点2 子供が認められる機会を大切にしているか

ポイント4

他を認める雰囲気を生みだそう

《感謝を伝え合い、自分自身を振り返る取組》

人権週間に、全校児童で「ありがとうカード」を作成した。誰もが見られるように、職員室前の廊下に「ほかほかの木」として掲示した。メッセージを読んだ感想を記入することで、自分の行動が人により影響を与えていることを知ることができている。自分自身の行動が誰かの「ありがとう」につながっていることを実感できる取組として継続して行っている。



【地域の見守りボランティアの方たちへのお礼の挨拶】



【メッセージをじっくり読む児童】

自分の行動が感謝されるとうれしいなあ

ポイント5

子供のよさを保護者、地域と共有できる体制を構築しよう

《学校と保護者、地域をつなぐ『PTA手帳』》

PTA活動や年間活動計画などに加えて、学校目標や学校経営方針（めざす学校像）を掲載した「PTA手帳」を毎年、各家庭に配付している。学校の目標を保護者や地域と共有することができ、登下校の見守りや読み聞かせ、クラブ活動等学校生活のさまざまな場面での支援をいただいている。児童は地域のぬくもりが感じられる中で学校生活を送ることができている。



【PTA手帳目次】

絆を感じる集団を育む

視点3 「共に伸びる」を意識した教育活動となっているか

ポイント6

グループで話し合う目的を明確にしよう

《仲間との関わり方の工夫》

話し合いの場におけるトークルールを作成し、「話す」「聴く」の段階を経て「応える」ことができることを目指した。相手の意見を受けて、自分の言葉で応えることができるようになり、互いの考えを深めている。



【トークルール】

相手の思いが分かる、自然と声をかけたいくなるよ。



視点4 「主体的な活動」を導き出せているか

ポイント7

教師の「させたい」を、子供の「やりたい」へ変えよう

《全員が参加、思考する生徒会役員選挙》

立ち会い演説会から立候補者によるディスカッション公開に変更した。テーマを「大きな声で挨拶ができる学校にするにはどうしたらよいか？」等、焦点化することで、一つの課題に対して多角的な考えが引き出されるようにしている。

挨拶がしっかりできている学級を昼放送で紹介して…



【課題について立候補者が考えを交わす】

ポイント8

子供の「自分たちでやるんだ」という気持ちを支えよう

《KPT法を取り入れた目標や改善点の意識化》

行事の後には、全校生徒にアンケートを行い、KPT法（keep-problem-try法）で振り返りを行っている。全校生徒の考えを把握したり、客観的に自分たちの活動を評価したりすることで、目標達成度や改善点を意識できるようにしている。まとめを生徒会室に掲示しておき、フォローアップにつなげている。



【KPT法での振り返り】



【KPT法とは】

視点5 子供同士が活躍を認め合える場を用意できているか

ポイント9

振り返りの場を大切にしよう

《「わくわく掲示板」の活用》

総合的な学習の時間の内容や活動後の振り返りを全校で共有できるよう「わくわく掲示板」を設けている。自分の振り返りが掲載されていると「これ私のだ！」とうれしそうになっている生徒の姿が見られた。また、教室移動の際に、掲示板を見て「6年生は防災の勉強だね」「避難所にも行ったんだ」と、生徒が話題にする姿も見られた。掲示板が、それぞれの学年のよさを知り、認め合える場となっている。



【「わくわく掲示板」を見て会話をする児童たち】

僕たちが載っているよ。野菜づくりは、とても楽しかったね。

別の班の人たちは、働くことについて勉強しているんだ。今度話を聞きたいね。

温かい居場所

魅力ある学校

どの子供も通いたくなる学校